JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 5 October 1978

入江先生の御逝去を悼む

大畑篤四郎（早稲田大学）

入江啓四郎先生は，8月13日脳血栓のため逝去された。朝の散歩と日曜ごとの山歩きを欠かさず，大学でもエレベーターを用いず，常に階段を上下される壮健な姿を知っている者には，10日に入院されて13日朝の逝去という急変は，人の世の無常を感じさせるものがあった。

先生は明治36年4月鳥取で生れ，享年75歳であった。昭和2年に早稲田大学を卒業して，ただちに外信記者となり，戦時中は同盟通信社ジュネーブ，パリ支局長としてヨーロッパの動乱を体験，また本社外信部長として活躍された。戦後同社が解散されると時事通信社に入社，同社の時事研究所所長を勤めた。傍ら昭和25年からは早稲田大学非常勤講師として外交史を講じ，時事通信社を退社してからは愛知大学，成蹊大学教授を歴任，さらに早稲田大学で客員教授として国際法の講座を担任された。昭和49年に早大を定年で退職されたのちは，創価大学教授となり，現職のまま逝去された。先生は国際法を専攻しながら，外交史に造詣が深く，また外信記者としての前半生の活躍から，国際政治の現実をとらえる鋭い感覚をもたれた。こうして国際法，外交史，国際政治にわたって，柔軟で幅のひろい視野と，実証的研究に徹する独自の学風が形成された。

先生は幼時に中国に在住していたことから，中国には一貫して愛着をもたれていた。通信社の多忙な仕事のなかから，昭和10年には名著「支那辺疆と英露の角逐」を公刊され，ついで「中国における外国人の地位」を発表された。さらにヨーロッパ在勤中に得た史料をもって浩瀚な3巻本の「ヴェルサイユ体制の崩壊」を著された。この書物を書く際は，毎日早暁3時頃から出勤までの時間に原稿を書きためていたように伺っている。（なお，外信記者としての習性から，先生は日本でも早朝から活動を開始し，夜は早く床につく朝型の生活が確立されていた）。

戦後の著作では，特にサンフランシスコ平和条約締結直後に発表された「日本講和条約の研究」で，精緻な研究と手早い作業によって人を（少くとも私を）驚かせた。さらに「現代国際問題要論」「領土・基地」など，国際法を中心としながら，現代国際政治の動向をとらえるような数冊の書物を公刊しているが，先生の多年にわたる研究が一斉に開花したのは，早大客員教授となられる頃から相次いで発表した一連の研究である。「中印紛争と国際法」は中国辺境をめぐる研究の延長線上にあり，「中国古典と国際法」は，日頃漢籍に親しまれていた先生の独擅場ともいうべき研究である。さらに「国際不正競争と国際法」「国際経済紛争の争訟処理」「国際法上の賠償補償処理」「開発途上国による国有化」の著書を続々と公刊された。これらの研究は特に国際経済法の分野を開拓したもので，また南北問題など現代の国際関係上先端を行くような問題にも迫っていた。

先生の研究の余滴のようなもので，ともすれば見失なわれ勝な2冊の書物に触れておこう。一つは処女作「支那辺疆……」と同じ昭和10年に出版された「支那新聞の読み方」である。政治，経済，社会，随筆，広告の各編にわかれ中国の新聞から文例を選び，文法，語註，邦訳，解説などを附したものである。また一つは生前最後の著書となった「列伝体史苑散策」で，昭和50年の刊行なので読まれた方も多いであろう。いずれも行間に先生の広い学識が窺えるもので，特に後者には古今東西にわたる学識と国際関係に対する先生の見識をくみとることができる。

先生の晩年は早朝から終日書斎に籠り，夜は夫人の手料理で盃を傾けられるという，研究三昧の超俗の生活であった。その夫人にも一昨年先立たれて，先生も寂しげであった。夫人の御霊とあわせて先生の御冥福を祈る。

1978年度秋季研究大会のお知らせ

日　　時：10月28日（土），29日（日）
場　　所：一橋大学（国立市中２丁目１）
共通テーマ：戦後国際秩序の再検討
受付開始：午前９時30分

第１日（10月28日）

「日本外交史」部会（午前10時～12時15分）
軍縮条約離脱後の日本海軍
工藤美知尋（東海大学大学院）
いわゆる「リゼンドル覚え書」について
中山　治一（愛知学院大学）

自由報告部会（１）（午前10時～12時15分）
朝鮮戦争をめぐる米中関係
伊豆見　元（東京外国語大学）
安全保障の類型学
猪口　孝（東京大学）

総　会（午後１時45分～２時30分）

「戦後国際秩序観」部会（１）
（午後３時15分～５時30分）
（ソ連）　宮内　邦子（防衛研修所）
（中国）　太田　勝洪（法政大学）

自由報告部会（２）（午後３時15分～５時30分）
ボリビア革命
吉森　義紀（神戸市外国語大学）
国際文化交流研究の現状
杉山　恭（国際交流基金）

懇親会（午後５時45分～７時15分）

第２日（10月29日）

「戦後国際秩序観」部会（２）
（午前10時～12時15分）
（第３世界）　山口　圭介（北九州大学）
（アメリカ）　有賀　貞（成蹊大学）

「東欧国際政治史」部会（午前10時～12時15分）
パリ平和会議におけるチェコスロヴァキア
林　忠行（一橋大学大学院）
1930年代の地域的安全保障問題
植田　隆子（津田塾大学大学院）

講演会（午後２時～３時30分）
戦後国際政治・経済秩序の危機
――アメリカにおける対照的な見方――
ロバート・ギルピン（プリンストン大学）

シンポジウム（午後３時30分～６時30分）
「戦後国際政治・経済秩序をいかに把握し，
新しい国際秩序をいかに求めるか」
報告者　勝部　元（桃山学院大学）
公文　俊平（東京大学）
矢野　暢（京都大学）
川田　侃（上智大学）

学会余録

菊井礼次（立命館大学）

今春の学会開催校であった立命館大学の一員として，学会開催にまつわる苦労話について何か書くようにとのことである。実のところ，出欠状の整理から会場の設営，懇親会のお膳立に至るまで企画・実務の一切をとりしきられた小林幸男教授こそ苦労話の唯一の持主であるが，代って二，三の点を披露しておくことにしたい

第一点は何といっても研究会場の確保であった。わが大学も学生数に比して校地・学舎の狭隘なマンモス私大の一つであり，しかも学会第一日目はウィークデーと重なって教室の大半が使用されていたため研究会場のやりくりには大きな苦労が伴った。小林教授と事務当局の努力で何とか確保しえたものの，第一日目には会場が隔った二学舎にまたがり，とくに迷路の入りくんだ以学館の会場では出席会員を右往左往させる破目になった。大学財政の民主的運営と低学費を誇るわが学園もこうした場合には国による私学助成の貧困ぶりを切実に感じさせられる。なおキャンパス一杯に林立する学生サークルのカラフルな立看や垂れ幕の間を縫って比較的地味な会場案内をいかに目立たせるかも苦心の一つだった。

第二点は月並とはいえ出席会員数，とくに懇親会出席者数の確定であった。最終的には懇親会予定出席者数を何とか確保したものの，当日になって出席を取り消されたり，また用意した名札の三分の一以上がフイになったり，最後まではらはらし通しであった。金閣寺や嵐山を近くに控えた研究会場はあるいは適切すぎたのかもしれない。二日目午後の総会出席者数はわれわれの不安を的中させた。

その他，アルバイト要員数を節約しすぎて小林教授自ら会場案内の立看に麗筆をふるったり当日朝までレジュメの袋入れに追いまわされたり，といったこともあったが，ともかく開催校の責任をほぼ大過なく果しえたこと何とか収支トントンであったことを書きそえてむすびとしたい。

学会活動報告（昭和53年4月～8月）

5月12日	第1回運営委員会開催
5月13日～14日	春季研究大会開催（於立命館大学）大会出席者約250名，懇親会約110名，
5月13日	第1回理事会・編集委員会（通算第2回拡大編集委員会）開催
5月14日	第1回総会開催
5月19日	J．フランケル教授（サザンプトン大学）講演会開催（国際交流基金との共催，於私学会館），テーマ：「国際通商政策に対するイギリスの態度」
6月10日	A．ラパポート教授（トロント大学・ベルリン大学比較政治学研究所）講演会開催（中央大学政治学研究会との共催，於中央大学），テーマ：「現代世界における平和の諸条件」
6月23日	維持会員を対象とする懇談会（於産業研究所），講師：山本満（法政大学），テーマ：「日本の外交論議再考」
7月7日	第2回運営委員会開催（次期評議員候補者の選出）
7月14日	D．シンガー教授（ミシガン大学）講演会開催（アメリカン・センターとの共催，於アメリカン・センター・ホール），テーマ：「1980年代におけるアメリカの軍事・外交政策」
8月10日	次期評議員候補者への就任依頼状の発送（8月31日次期評議員 285名確定）
8月30日	機関誌『国際政治』第59号（昭和53年度第1号）「非国家的行為体と国際関係」の発行，配布

（大畠英樹）

研究分科会の紹介と近況

アメリカ外交部会

有賀　貞（成蹊大学）

昨年，学会の研究部会の制度が発足し，地域研究の部会もいくつか設けられ活動をしておりますが，アメリカに関する部会はありませんでした。アメリカに関する部会もある方がよいと思っておりました処，細谷理事長からその準備をせよという御指示がありました。5月の研究大会の際，アメリカ外交に関心をお持ちの方々に何人かお目にかかり，この件についてお話ししましたところ御賛同を得ましたので，「アメリカ外交部会」の最初の会合を秋の研究大会中に開けるよう準備をすることにいたしました。アメリカ外交史および近年のアメリカの対外政策に御関心ある会員の方々の情報交換の場としてまいりたいと存じます。最初の会合で今後の運営の方法について御相談いたしたいと存じます。その時，どなたかに書評ないしは動向の紹介をしていただこうと存じまして二，三の方々に打診しております。また私が作成を準備しておりますアメリカ外交史邦文文献目録をお配りしたいと思っております。

直接私に御関心をお示し下さいました方々，会員の中でアメリカ外交について御関心があると思われる方々には，学会の前により詳しいお知らせをするつもりでおりますが，御参加をよろしくお願い申上げます。

東アジア国際政治史部会

宇野重昭（成蹊大学）

この部会は過去4回（うち1回は大会開催時）研究会を開きました。出席者は20名前後，若い世代に属する人が圧倒的です。この部会は，研究対象が多種多様なところから，焦点をしぼって討議を集中させるということは困難ですが，その代り，若い世代の人たちに，学会報告以前の段階の試論を思いきって展開してもらっています。またなるべく研究状況を把握しておくために，各人の研究状況，文献，資料の情報交換などに力を入れています。研究会の内容は，たとえば次のようなものです。

横山宏章「孫文の民族運動と外交交渉――1923年の『関余回収運動』を例として」

滝田賢治「中国幣制改革に対するアメリカの対応――F．D．ルーズベルトを中心として」

草野厚「戦後日本の外交政策決定過程におけるいくつかの特徴――岸内閣の対中政策を例として」

別枝行夫「日中国交正常化――日本政府の政策決定過程」

大学院生研究会

佐藤幸男（武蔵工業大学）

本年5月より前幹事の諸先輩から，新たに引き続くことになりました。本研究会をより一層拡大発展させたいものと新幹事一同強く願っております。

本研究会は大学院間および専門領域間の障壁を超え，相互の知的交流を通じて積極的に研究成果を発表しあう知的アリーナであることから多くの大学院生の参加・登録を希望します。5月以降，何回か運営方法を中心とする会合を開き，6月下旬には首都圏の大学院当該研究科へ院生の動態を探るべく調査を実施・依頼し，多くの参加希望者を募りました。その結果を集計（目下集計中）し，今後サブ・研究グループの組織化を押しすすめたいと考えております。

第1回研究会は7月12日（水）多くの諸先輩のご協力をいただきながら，ミシガン大学のデビッド・シンガー教授を迎えて，「国際政治学の回顧と展望―自己の研究動向とのかかわりの中で―」と題し，13大学院から約55名の参加のもとに早大大隈会館で開催した。第2回研究会は9月下旬から10月上旬にかけて開催する予定であり

ます。詳細が決定され次第，各大学院および本研究会登録者に直接連絡いたしますので多数ご参加下さい。

なお本年度の新幹事はつぎのとおりです。滝田賢治，磯崎博司，多賀秀敏，植田隆子，佐藤幸男の以上５名ですので何卒よろしくお願いいたします。

海外留学記

ウイルトン・パーク会議のこと

瀬　川　善　信（埼玉大学）

私は昨年から今年にかけて，文部省の長期在外研究員として，海外における研究の機会を得ました。この間にあって，アメリカではアメリカ国際法学会（サンフランシスコにて）に出席し，イギリスではウイルトン・パーク国際シンポジウムに参加致しました。ウイルトン・パーク・コンフェレンスの開催されたウイストン・ハウスはサセックスにあり，ロンドンの南50マイル，イギリス海峡の北７マイルの所です。私はヴィクトリア駅よりブライトン経由で，ショアハム・バイ・シー駅で下車し，迎えのバスでウイストン・ハウスへ行きました。この会議は既に194回開かれ，今回の会議は195回ウイルトン・パーク・コンフェレンスという訳です。この会議の目的は英国が国際世論の形成に役立つということから，発足したものです。とくに西欧諸国の協力を促進するため，各国の共通問題につき意見交換の場を提供するということです。そして日本の大使をふくめ21カ国の大使がアドヴァイザリー・カウンシルのメンバーです。

各回毎に特殊テーマを設け討論をすることにしています。今回のテーマは，「国際・国内政治のストレスのもとにおける欧州統合」というもので，今年の１月15日から21日までの１週間でした。第１日は夕食のあと館長の歓迎挨拶，各人の紹介，会議の概要等につき説明があり，就寝という訳です。今回の会議にはイギリスはもとより西欧各国から若手外交官，ジャーナリスト，研究者などおよそ30名程参加しました。アジア人としては私１人でした。

16日朝９時より愈々会議が正式に始まりました。基調講演は駐英アメリカ大使キングマン・ブルースター博士によりなされました。ブルースター大使は今年の卒業式までエール大学の総長を務め，同卒業式においてエール大学より名誉法学博士を授与されました。当時私はエール大学におり，卒業式にも参列し，博士号授与の模様をまのあたりにみましたので，講演のあと，その旨を伝え，エール大学のことなどお話致しました。ブルースター大使は基調講演において，軍備問題，貿易問題，エネルギー問題，ユーロコミュニズム等につきアメリカとヨーロッパとの関係に論及しました。午後は３グループに分かれ，この基調講演を中心にディスカッションがなされたのですが，グループは国籍，言語，職業等が考慮されて，分かれる訳です。会議は毎日，外部からの１人または２人による講演により始まり，その内容を中心に食事とお茶の時間を除いて朝から夕食後まで討論を行なうのです。

１週間の会議期間中いつも討論というわけではなく，18日の午後はガトウィック空港見学のエクスカージョンがあり，19日の夜はブライトンの劇場で観劇をしました。演し物はイングリッド・バークマン主演でウォーター・イン・ザ・ムーンというのでした。バーグマンが42歳の役柄だった訳ですが，まわりの人々は，彼女は60歳のはずだと話しておりました。最後の日は夕食パーティーが開かれ，私も参加者の何人かと同様にロンドンから妻を呼び，皆と別れを惜しんだのです。

◇　関連学会開催のお知らせ

日本政治学会　10月７日（土），８日（日），
　於慶應義塾大学

国際経済学会　10月14日（土），15日（日），
　於慶應義塾大学

国際法学会　10月21日（土），22日（日），
　於国学院大学

日本ＥＣ研究者大会　11月11日（土），12日（日），
　於同志社大学

アジア政経学会　11月18日（土），19日（日），
　於一橋大学

British Internatinal Studies Association (BISA)
　12月18～20日
　於　St. Catherine's College, Oxford

International Studies Association (ISA)
　1978年３月21～24日，於トロント

会員による新著　（昭和53年３月～８月）

田北亮介『現代アメリカ外交論――その思想と行動』日本評論社

高橋通敏『中東戦争――歴史と教訓』国際問題研究所

原覚天編『東南アジア諸国の福祉政策と国際協力』アジア経済出版会

オタ・シク（高橋大雄，渡辺文太郎訳）『クレムリン――官僚支配の実態』時事通信社

C.H. ドッド（比嘉幹郎・江上能義訳）『政治発展論』早大出版部
酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』東大出版会
中嶋嶺雄『日本外交の選択——米中ソ世界戦略のはざまで』東洋経済新報社
寺谷弘壬『ソビエトの若者たち』学陽書房
中川文雄・駒井洋・斎藤広志編『ブラジル社会と日本』国際問題研究所
大平善梧・横川新編著『国際関係論』北樹出版
秦郁彦『八月十五日の空——日本空軍の最後』文芸春秋
守川正道『フィリピン史』同朋社
矢野暢『東南アジア政策——疑いから信頼へ』サイマル出版会
林卓男『食い逃げか，繁栄か——私の日本建て直し論』創拓社
大畑篤四郎『日本外交史』東出版
アンドレ・G・フランク（西川潤訳）『世界資本主義とラテンアメリカ』岩波書店

新 著 余 滴

『国際連合論序説』，『別冊　事例研究』（新有堂）

斎 藤 鎮 男

私は国際連合を実地で見て，それが組織層とシステム層と併有する重層的構造をもつことを前提として研究すべきことを知った。

ところが，国際連合の組織性については，わが国にも多くの優れた研究があるが，そのシステム性を対象とした研究はなお未開であることを知って残念に思い，非才を顧みずその序説を試みてみたのが本書である。

システムとしての国際連合においては，国際システムや国家システムにおける場合と異なり，パワー，意思決定の過程，交渉の態様，圧力団体の種類等の諸分野に関して独特の特徴があることが認められる。そこで，まずこのことを明らかにすることとした。

ついで，国際連合は，それ自身がシステム性をもつと同時に，上級の国際システムのサブ・システムであることも否定できない。そのため，国連システムは国際システムと連結関係にあり，その事実がとくに見立つのは，非植民地化と国連構造の関係，活動の拡散・調整と国連機関の関係，主権平等主義と表決の関係等の場合である。これを第二のテーマとした。

また，国際連合の組織性とシステム性が適当なバランスを失ったため，その活動と機能があるべき有効な働きをなしえなくなった最近の傾向は，国連改造の必要を求めている。第三にこの問題をとりあげることにした。

以上三つの視座は，国連史に生起した幾多の事例に徴するとき，明瞭に裏付けうるので，別冊として事例研究を行った。

右のような諸問題を理論と実際について解明しようと努めたが，自らの浅学と教科書としての制約とのため充分意を尽くし得なかったことを残念に思っている。

なお，本書を補完するため書かれたコンセンサス制と極小国家についての論文（前者は『世界経済評論』，後者は『月刊国連』の最新号に掲載予定）を参考とされることをお願いする。

『現代アメリカ外交論』（日本評論社）

田 北 亮 介

私が当書をまとめようと考えたのは，20年来，まあ一貫した問題意識で検討してきた課題を，ここらで一応整理しておきたかったからである。

私が研究をはじめる頃は，「冷戦信仰」華やかなりし時期で，一方で資本主義と社会主義は相容れない体制だから「体制間矛盾」が存在するのは当然だという考え方から冷戦構造をそのまま肯定する風潮があると同時に，他方ではアメリカの冷戦外交を当然のこととして是認する風潮もあった。ともに特殊戦後的状況としての冷戦現象を固定的に把えていたといってもよいかも知れない。

このような状況のなかで，私の問題意識は，この冷戦現象はすぐれて政治的次元で出現している現象であって，それを「階級矛盾」というようなものと同次元のものに帰するのは誤りではないかと，いう疑問が中心であった。この疑問から，まず第一の課題は，アメリカ外交からアプローチすることによってこの政治的次元の特殊現象を解明しうるのではないかということ，そして第二の課題は，「冷戦論」が学説的にも定着していたことから，30年代のアメリカ外交を再検討することによってこの隘路を克服することであった。

30年代のアメリカ外交——F.D.ルーズヴェルト外交は，単に従来の外交史的アプローチでは再検討できない。内政を主軸にした検討となると，ニューディール，さらにそれを支えた人民の戦線を明確にする必要があろう。この結果がF.D.ルーズヴェルトの反ファシズム外交論として整理した部分である。これと対照させつつ戦後外交を検討したのであるが，それは，したがって反ファシズム外交の対立物という位置を与えることになった。

戦後外交は，ともに基本的にはその視角から把えた。しかし，政治的次元の現象としての冷戦現象と多極現象は，それだけでは解明されない。思想と行動の視点からそれぞれ独自に論じ，再検討したのは，このような理由からである。

資料センターめぐり

外交史料館

海野芳郎（外務省外交史料館）

現在その面影すら全くない，かって外務省構内にあった“焼跡書庫”の史料をひきつぎ，南側に東京タワーの見える麻布台の一角（港区麻布台1-5-3）に，外交史料館が開設したのが昭和46年4月，爾来ここに保存され公開された史料は，1）本省・在外公館間の往復電報・公信その他を整理分類，これをファイルした「外務省記録」（外務省創立以来2次大戦終結まで約48,000冊），2）安政6年から明治初年までの外交史料「正・続通信全覧」（2,103巻），それに3）「条約書」（約600件），4）「国書・親書」（1,100通），であった。ついで5年後の昭和51年5月から，2次大戦以後の記録（サンフランシスコ条約批准まで）についても，30年原則に基づき今日まで4回にわたる公開措置が講ぜられ，計425冊（98,000ページ）が公開された。ただし戦後史料に限り，紙質不良のためマイクロフィルムのみ利用を認めている。これら史料の閲覧条件は，満20歳以上，信頼すべき紹介状か推せん状または身分証明書を所持し，閲覧室の所定用紙に申し込めばよい。3階建の館内には，地下1階に史料を収容する電動式の書庫，1階に史料を閲覧者に貸与する閲覧室と，日本外交史上特筆すべき史料・写真を並べた展示室，2階には既述外務省記録等から主要文書を選び『日本外交文書』を刊行する編さん室と，講堂，3階にはその他の事務室がある。明治初年を第1号（昭和11年発行）とし，以後暦年別に編さん刊行された『日本外交文書』は現在（昭和53年9月），総計141巻に上るが，『条約改正関係』，『北清事変』，『日露戦争』，『小村外交史』，『日本外交年表並主要文書』等の別巻も含まれ，最近では『ワシントン会議上・下』や『満州事変第1巻』3冊が公刊された。また前記『日本外交文書』とは別であるが，『外務省の百年』や『終戦史録』も特記すべき刊行物である。なお昭和49年『日本外交史辞典』が企画され，幕末から日中国交正常化までの，日本外交史上の事件・事項等2,300に上る項目に，条約・協定・閣議決定書等を付録に加えた，A5版1,300頁の同書が近い将来出版されよう。

事務局ニューズ

（1）新入会員

（2）海外学会との論文交換

BISA への推薦論文である鴨武彦「国際統合と平和の力学」（『国際政治』第55）号につきまして，BISA より1979年度の British Journal of International Studies のいずれかの号に掲載したい旨の連絡がまいりました。

編集後記

JAIR・NEWSLETTER 第5号をお届け致します。

8月13日入江啓四郎先生が亡くなられました。心から先生の御冥福をお祈りするとともに，追悼文をお寄せいただいた大畑会員に厚くお礼申し上げます。

本号には，新しい企画として，春季研究大会の開催校であった立命館大学の菊井会員による「学会余録」，瀬川会員による「海外留学記」，「資料センターめぐり」の第一回目として海野会員による「外交史料館」を加えました。

JAIR・NEWSLETTER は，今年から年四回（4月，7月，10月，1月）発刊となり，編集委員も忙しくなってまいりました。何んといっても問題は記事集めであり，会員諸兄の積極的な御投稿をお待ち申し上げております。（T．T．）

昭和53年10月1日　発行
日本国際政治学会
ニューズ・レター委員会
〒108 東京都港区三田2—15—45
慶應義塾大学法学部松本三郎研究室内
発行人　細谷千博
編集人　松本三郎
印刷所　梅沢印刷所